

宮崎市文化財調査報告書第 121 集

き た じゅう
北中遺跡 IV

教会建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書



2018

宮崎市教育委員会

きたじゅう
北中遺跡Ⅳ

教会建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

宮崎市教育委員会



調査地周辺空中写真





調査区空中写真

序 文

本書は、平成 26 年度に教会建設にともなって実施された北中遺跡 4 次調査の発掘調査報告書です。

北中遺跡は、新別府川河口の近くにある遺跡で、これまでに 4 次につながる発掘調査がおこなわれています。これらの調査によって、わたしたちの先人方が残した生活の痕跡が数多く確認されました。中でも古墳時代の人々の生活の痕跡が最も多く確認されており、古墳時代にはこの北中遺跡において大規模な集落が営まれていたことが明らかとなっています。

とくに、今回成果を報告する 4 次調査では、大型の掘立柱建物や竪穴建物などが確認されました。このことは、この 4 次調査区がある場所が、古墳時代における北中遺跡集落の中で、最も中心的な位置を占める場所であったことを示しているものと考えられます。こうした古墳時代の大型建物が見つかることは珍しく、宮崎市内の古墳時代の社会や集落のあり方を知る上でも貴重な調査例となりました。

このように、発掘調査によってこれまで知られていなかった地域の歴史が明らかになることは大変有意義なことです。しかし、一方で発掘調査の大部分は開発にともなうものであり、調査後には遺跡は失われてしまうことが前提であることも忘れてはなりません。わたしたちはこうした事実を真摯に受け止め、本市の文化財保護について皆さんとともに考え、地域の歴史や文化を守り伝えていきたいと思います。

本書がこうした活動のきっかけの一つとなり、より多くの方々に本市の歴史や文化を守り伝えていくことの大切さを知っていただく一助となれば幸いです。

平成 30 年 3 月

宮崎市教育委員会
教育長 二見 俊一

例 言

- 1 本書は、宮崎市教育委員会が平成 26 年度に実施した北中遺跡第 4 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成 26 年 9 月 29 日から平成 27 年 1 月 30 日までの期間実施した。整理作業は平成 27 年 9 月 1 日から平成 28 年 1 月 19 日、平成 28 年 9 月 1 日から平成 28 年 10 月 14 日までの期間実施した。

3 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

現地調査（平成 26 年度）

総 括	文化財課長	橋口 一也
	副主幹兼埋蔵文化財係長	島田 正浩
調整事務主 査		島枝 誠
事 務 主 査		島枝 誠
担 当 主 任 技 師		西嶋 剛広
	嘱 託	大嶋 昭海
	嘱 託	川野 誠也
	嘱 託	黒木 星佳

整理作業（平成 27 年度、28 年度）

総 括	文化財課長	日高 貞幸
	副主幹兼埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務主 査		金丸 武司
事 務 主 任 主 事		武富 知子
担 当 主 任 技 師		西嶋 剛広
	嘱 託	菊地 ひろみ
	嘱 託	佐伯 美佐子
	嘱 託	小野 貞子
	嘱 託	小牟田 智子
	嘱 託	大嶋 昭海
	嘱 託	白上 いづみ

- 4 本書の執筆、編集は西嶋、大嶋がおこない、第 I、II 章は西嶋が、第三章の遺構については主に大嶋が、遺物については主に西嶋が、第四章については西嶋が担当した。
- 5 掲載した図面のうち、現場における実測は西嶋、大嶋、川野、黒木がおこなった。遺物の実測は西嶋、大嶋、菊地、佐伯、小野、小牟田、白上が整理作業員の協力を得ておこなった。遺物実測の一部は（株）九州文化財研究所に委託した。
- 6 現場および出土遺物の写真撮影は西嶋、大嶋、川野、黒木がおこない、現地における空中写真撮影は（有）スカイサーベイ九州に委託した。
- 7 本書の図で示す方位記号はすべて真北を示す。
- 8 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。
 竪穴建物：S A、掘立柱建物：S B、土坑：S C、溝状遺構：S E、ピット：S H
- 9 本調査における出土遺物、実測図、撮影写真などはすべて宮崎市教育委員会で保管している。これら資料の有効な活用を望む。
- 10 本発掘調査にかかる文書手続きは以下のとおりである。

試掘完了報告 平成 26 年 7 月 14 日 宮教文第 374 号

工事届出（文化財保護法第 93 条）平成 26 年 9 月 1 日

着 手 報 告 平成 26 年 11 月 5 日 宮教文第 645 号

終 了 報 告 平成 27 年 3 月 5 日 宮教文第 645 号 1

発 見 通 知 平成 27 年 2 月 3 日 宮教文第 919 号

保 管 証 平成 27 年 3 月 5 日 宮教文第 919 号 1

本文目次

第1章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の経過	3

第3章 調査の成果

第1節 調査成果の概要	4
第2節 基本土層	4
第3節 竪穴建物	4
第4節 掘立柱建物	39
第5節 土坑	49
第6節 溝状遺構	51

第4章 まとめ

第1節 北中遺跡における古墳時代集落の変遷	71
第2節 北中遺跡における古墳時代の厳治について	71
第3節 宮崎市海岸部の古墳時代集落と北中遺跡	73

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 北中遺跡の範囲と調査区の位置	3
第3図 遺構配置図	5
第4図 竪穴建物2実測図	6
第5図 竪穴建物2出土遺物実測図	7
第6図 竪穴建物10、11実測図①	9
第7図 竪穴建物10、11実測図②	10
第8図 竪穴建物10、11柱穴実測図	10
第9図 柱穴3遺物出土詳細図	10
第10図 竪穴建物10土器埋設実測図	11
第11図 竪穴建物11南壁遺物出土状況図	11
第12図 竪穴建物11北壁遺物出土状況図	11
第13図 竪穴建物11建物内土坑実測図	11
第14図 竪穴建物10、11出土遺物実測図	12
第15図 竪穴建物22実測図	14
第16図 竪穴建物22地床実測図	14
第17図 土器埋設実測図	14
第18図 竪穴建物22遺物出土状況図	15
第19図 竪穴建物22出土遺物実測図①	16

第20図 竪穴建物22出土遺物実測図②	17
第21図 竪穴建物22出土遺物実測図③	18
第22図 竪穴建物22出土遺物実測図④	19
第23図 竪穴建物22出土遺物実測図⑤	20
第24図 竪穴建物22出土遺物実測図⑥、竪穴建物24出土遺物実測図	21
第25図 竪穴建物24、25実測図	23
第26図 竪穴建物24炉跡実測図	23
第27図 竪穴建物25土坑1実測図	23
第28図 竪穴建物25遺物出土状況図	24
第29図 竪穴建物25出土遺物実測図①	25
第30図 竪穴建物25出土遺物実測図②	26
第31図 竪穴建物25出土遺物実測図③	27
第32図 竪穴建物25出土遺物実測図④	28
第33図 竪穴建物25出土遺物実測図⑤	29
第34図 竪穴建物27、土坑46、溝状遺構26実測図	30
第35図 竪穴建物27出土遺物実測図	30
第36図 竪穴建物28実測図	32
第37図 竪穴建物28地床実測図	32
第38図 竪穴建物28遺物出土状況図	33
第39図 竪穴建物28出土遺物実測図①	34
第40図 竪穴建物28出土遺物実測図②	35
第41図 竪穴建物28出土遺物実測図③	36
第42図 竪穴建物28出土遺物実測図④	37
第43図 竪穴建物28出土遺物実測図⑤	38
第44図 竪穴建物29、34、35実測図	39
第45図 竪穴建物29出土遺物実測図	40
第46図 竪穴建物30実測図	41
第47図 掘立柱建物1、土坑32実測図	43
第48図 掘立柱建物9実測図①	44
第49図 掘立柱建物9実測図②	45
第50図 掘立柱建物9実測図③	46
第51図 掘立柱建物16、土坑53実測図①	50
第52図 掘立柱建物16、土坑53実測図②	51
第53図 掘立柱建物31実測図	53
第54図 掘立柱建物33実測図	55
第55図 掘立柱建物4実測図	56
第56図 掘立柱建物出土遺物実測図	56
第57図 土坑18、20、溝状遺構19、34実測図	57

第 58 图	土坑 18 土層断面図	57	図版 4	竪穴建物 22、土器埋設図	79
第 59 图	土坑 37、53 実測図	57	図版 5	竪穴建物 22 遺物出土状況、同出土遺物①	80
第 60 图	土坑 38、溝状遺構 26 実測図	57	図版 6	竪穴建物 22 出土遺物②	81
第 61 图	土坑 18 出土遺物実測図	57	図版 7	竪穴建物 22 出土遺物③	82
第 62 图	溝状遺構配置図	58	図版 8	竪穴建物 24、25	83
第 63 图	溝状遺構 3、54 土層断面図	59	図版 9	竪穴建物 24 出土遺物	84
第 64 图	溝状遺構 17、26 土層断面図	59	図版 10	竪穴建物 25	85
第 65 图	溝状遺構 5、42 土層断面図	59	図版 11	竪穴建物 25 出土遺物①	86
第 66 图	溝状遺構 21 土層断面図	59	図版 12	竪穴建物 25 出土遺物②	87
第 67 图	溝状遺構 19、13、51、23 土層断面図	59	図版 13	竪穴建物 27、同出土遺物	88
第 68 图	溝状遺構 12 土層断面図	60	図版 14	竪穴建物 28	89
第 69 图	溝状遺構出土遺物実測図①	61	図版 15	竪穴建物 28 遺物出土状況	90
第 70 图	溝状遺構出土遺物実測図②	62	図版 16	竪穴建物 28 出土遺物①	91
第 71 图	北中遺跡 4 次調査区古墳時代主要遺構配置図	72	図版 17	竪穴建物 28 出土遺物②	92
			図版 18	竪穴建物 29、34、35、同出土遺物	93
			図版 19	掘立柱建物 1	94
			図版 20	掘立柱建物 9	95
			図版 21	掘立柱建物 9、掘立柱建物出土遺物	96
			図版 22	掘立柱建物 16	97
			図版 23	掘立柱建物 31	98
			図版 24	土坑 18、38、土坑 18 出土遺物	99
			図版 25	溝状遺構①	100
			図版 26	溝状遺構②	101
			図版 27	溝状遺構③、同出土遺物	102
			図版 28	北中遺跡鉄器製作関連遺物	103

表 目 次

第 1 表	掘立柱建物 1 土層注記	43
第 2 表	掘立柱建物 9 土層注記①	46
第 3 表	掘立柱建物 9 土層注記②	47
第 4 表	掘立柱建物 9 土層注記③	48
第 5 表	掘立柱建物 16 土層注記	52
第 6 表	掘立柱建物 31 土層注記	54
第 7 表	掘立柱建物 33 土層注記	55
第 8 表	竪穴建物、掘立柱建物一覧表	63
第 9 表	出土土器観察表①	64
第 10 表	出土土器観察表②	65
第 11 表	出土土器観察表③	66
第 12 表	出土土器観察表④	67
第 13 表	出土土器観察表⑤	68
第 14 表	出土土器観察表⑥	69
第 15 表	出土土器観察表⑦	70
第 16 表	出土石器観察表	70
第 17 表	出土鉄器観察表	70
第 18 表	北中遺跡 4 次調査区建物変遷表	72

図 版 目 次

図版 1	竪穴建物 2、同出土遺物	76
図版 2	竪穴建物 10、11	77
図版 3	竪穴建物 10、11 出土遺物	78

第1章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

宮崎市は、宮崎平野南部の大淀川下流域に位置している。市域は、大きく、九州山地と鰐塚山地に含まれる山間部と、大淀川河口周辺にひろがる平野部からなる。平野部は、山間部から派生して伸びる低丘陵や、主に大淀川的作用によって形成された沖積平野からなっており、沖積平野部は旧河道部分の低湿地、自然堤防などの微高地が複雑に入り組んだ地形をなしている。また、平野部の海岸沿いには4本の砂丘列が発達しており、それぞれの砂丘列後背には低地が存在する。河川は、上記大淀川が市街地中心を貫流し太平洋へ注いでいるほか、石崎川、新別府川、八重川、清武川、加江田川など複数の河川が流れている。

北中遺跡は、平野部の海岸近く、大淀川と新別府川に挟まれた、現宮崎市街地中心部一体に広がっていた微高地の一部と考えられるが、中でももっとも海に近い場所にあり、海方向に向かって岬状に突出するような場所の突端付近に立地している。遺跡のすぐ北側には新別府川が流れており、河口までの距離は約1.1kmである。遺跡は新別府川河口付近を望む海に向かって開けた場所であったものと考えられる。遺跡の立地する微高地上の標高は約5m、周辺の低地の標高は約3～4mである。新別府川を挟んだ北側には、上記の4本の砂丘列のうちもっとも内陸に位置する第1砂丘南端が迫っている。

第2節 歴史的環境

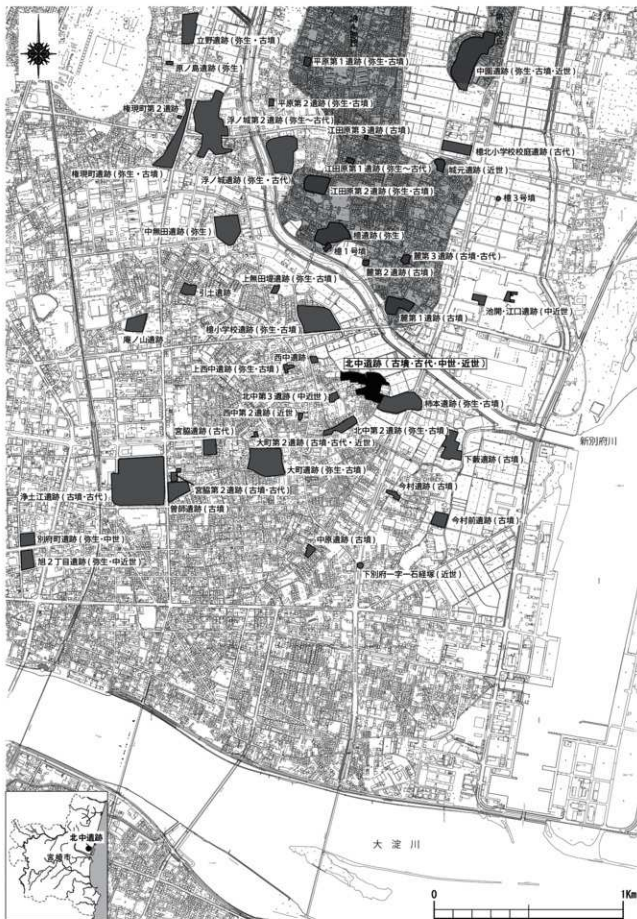
北中遺跡周辺では、主に北中遺跡の所在する沖積微高地と海岸沿いに発達する砂丘列上を中心に埋蔵文化財包蔵地が確認されている。また、近年では砂丘間低地でも調査が実施され、徐々に埋蔵文化財包蔵地の存在が明らかとなってきている。

周辺でもっとも古いのは第1砂丘上の平原遺跡で、縄文時代の市来式土器が確認されたといわれている。弥生時代には遺跡が増加し、第1砂丘上では、前期の小児用甕棺が確認された憶遺跡などが確認されている。沖積微高地上では、中期末から後期初頭の周溝状遺構が確認された大町遺跡、浮ノ城第2遺跡などがある。また低地では弥生期のものとされる水田跡が検出された浮ノ城遺跡、中期末から後期初頭の周溝状遺構や掘立柱建物で確認された中須遺跡などがある。

古墳時代の遺跡も同様に、沖積微高地と砂丘上を中心に展開している。今回報告の北中遺跡のほか、大町遺跡、浄土江遺跡などが沖積微高地上に確認されており、古墳時代後期を中心とする集落が存在したことが明らかとなっている。古墳については、新別府川を望む第1砂丘南端にあり、宮崎市域最古の前方後円墳とされる憶1号墳（52m）や、中期の滅失古墳周溝が確認された江田原第3遺跡、後期後半の地下式横穴墓が確認された北中遺跡、大町遺跡のほか、現宮崎駅周辺に詳細不明ながら内行花文鏡や銀装馬具が出土した広島古墳群が存在しており、古墳時代を通して古墳の築造がおこなわれていたと考えられる。

古代では、宮脇第2遺跡、浄土江遺跡、北中遺跡において住居跡が確認されている。この他は目立った遺構、遺物はこれまでに確認されておらず、古代の北中遺跡周辺については明らかでない部分が多い。しかし、新別府川北側の砂丘上にある猿野遺跡で古代瓦が出土しており、古代においても当地域周辺の重要性が伺われる。

中世には、海岸に近い低地にある池間・江口遺跡において、15世紀代の居館が確認され、輸入青磁や染付などが多く出土した。近世の様相については、ほとんど明らかでなく、散布地である城元遺跡のほか、試掘、確認調査において当該時期の遺構や遺物が点的に知られる程度である。



第1図 周辺の遺跡 (S=1:20000)

第II章 調査に至る経緯と経過

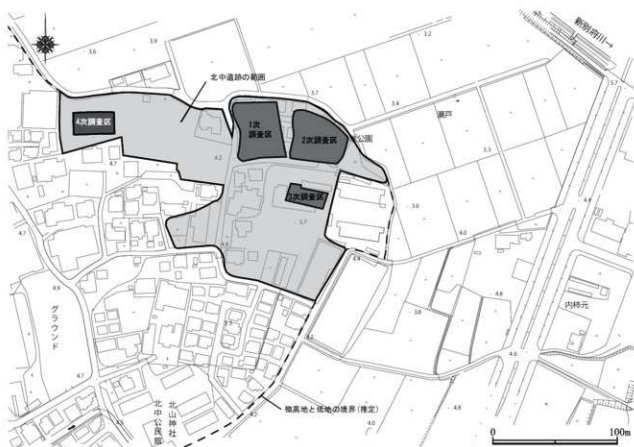
第1節 調査に至る経緯

平成 26 年 5 月 12 日、カトリック教会の建設にともない、宮崎市吉村町北中甲 1238 番地における埋蔵文化財所在の有無について照会がなされた。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「北中遺跡」の隣接地であるため、平成 26 年 6 月 30 日～7 月 7 日にかけて試掘調査を実施した。その結果、古墳時代の遺構を中心とする多数の遺構や遺物が確認された。

そのため、事業者との埋蔵文化財に関する協議を重ねたが、建物建築の工法などとの兼ね合いから、一部の遺構について破壊を免れない状況であった。したがって、建物の建築にともなう遺構にまで影響の及ぶ範囲である約550平方メートルを対象に本発掘調査を実施することとなった。現地における発掘調査は平成26年9月29日から平成27年1月30日まで、現地調査終了後の整理作業は平成27年9月1日から平成28年1月19日、平成28年9月1日から平成28年10月14日の期間実施した。

第2節 調査の経過

調査は、バックホウによる表土掘削の後、作業員による人力での遺構検出、遺構掘削を実施した。掘削の進んだ遺構については、順次、調査員による手掘りやトータルステーションを用いた実測作業、フィルムカメラ、デジタルカメラによる写真撮影によって記録作業を実施した。合わせて、調査区全体および周辺の地形を記録するための空中写真撮影もおこなった。



第2図 北中遺跡の範囲と調査区の位置 (S=1:3000)

第三章 調査の成果

第1節 調査成果の概要

今回の調査で確認された遺構、遺物は主に古墳時代に属するものであった。古墳時代の遺構には、堅穴建物12軒、掘立柱建物5棟、土坑3基、溝状遺構4条がある。このほか、古代の溝状遺構2条、中世の掘立柱建物1棟、溝状遺構3条、近世の溝状遺構1条などが確認された。

遺物は各遺構から出土しており、古墳時代の遺物は土師器、須恵器を中心として、鉄製品や滑石製白玉、有孔円板、土玉などがある。古代、中世の遺物には土師器、須恵器などがある。

第2節 基本土層

今回調査区では、現地表面下に表土（第34、44、46、67図のⅠ層）があり、その下層に遺物包含層である暗褐色粘質土層（第34、44、67図のⅡ層）が堆積する。遺構検出面はこれらの層下で検出される黄褐色粘質土である。この黄褐色粘質土層は周辺の沖積微高地上に広く認められる土層であり、台地上でのアカホヤ火山灰層に相当する面とみられる。この下層には砂質土が厚く堆積しており、黄褐色粘質土と類似する砂質土から白色砂質土、青灰色砂質土へと次第に色調が変化している。これら砂質土間には、一部に暗褐色砂質土が間層として認められるが、これは、いわゆるクロスナ層に相当する可能性がある。このほかに薄い粘質土層が間層として認められる。これら厚く堆積する砂質土層の下には小礫からなる層が存在する。

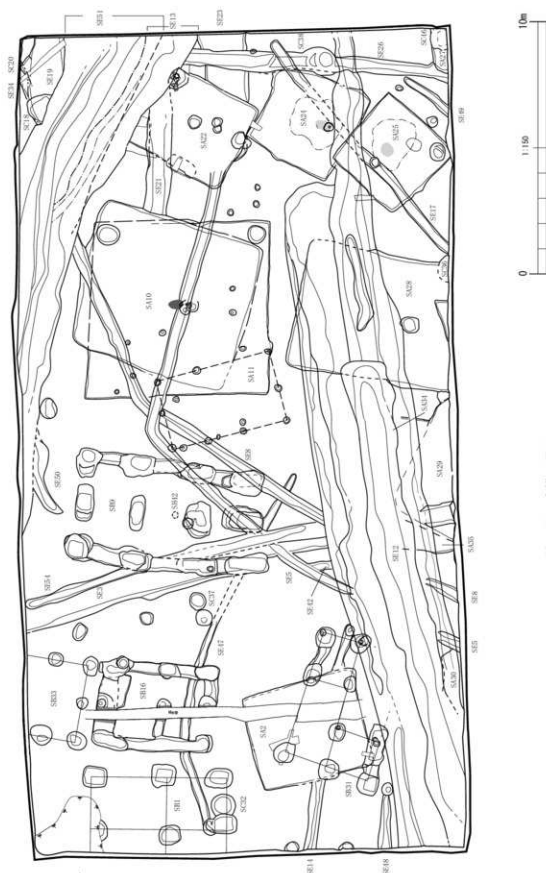
遺構は、おおむね黄褐色粘質土下層の砂質土層中まで掘り込まれており、近世に構築された溝状遺構13のみが砂質土層下層の礫層まで達している。本報告では、遺構検出面である黄褐色粘質土層以下の地山に言及する際、便宜上、黄褐色粘質土を地山土、白色砂質土を地山砂、青灰砂質土を青砂と略して号することとする。

第3節 堅穴建物

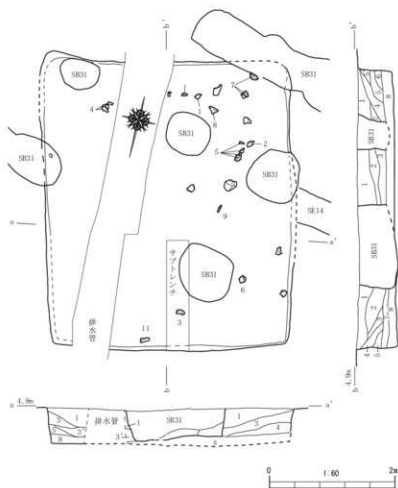
堅穴建物12軒を検出した。全て古墳時代の建物であり、時期は概ね5世紀後半～6世紀末の間に収まる。主に調査区の東側に偏って分布している。検出したほとんどの堅穴建物では、検出面から0.6m程度掘り込まれており、残存状態は良好である。以下、堅穴建物について詳細を述べる。

堅穴建物（SA）2（第4図、第5図） 調査区南西部に位置する。方形の堅穴建物である。溝状遺構14を切り、掘立柱建物31に切られている。また、建物の中心からやや東寄りを現代の排水管が通っており、その部分は未掘である。規模は、長軸4.8m、短軸4.0mである。検出面から0.4m程掘り下げたところで貼床（8層）を検出した。貼床は地山土が混じった砂質土であり、硬化する箇所等は認められなかった。検出面から掘方までの最大深は0.66mであった。柱穴や火処等の建物内遺構は確認できなかった。なお、建物南東隅に一部張り出す部分があるが、掘立柱建物31の掘り込みを建物2のコーナー部と誤認して掘削してしまった可能性もあり、堅穴建物2の本来の形態かは不明である。建物の埋土は、地山土を含む2層以下と含まない1層に大きく分かれていた。

遺物は主に床面直上とやや浮いた位置で出土した。南西部に集中する傾向がある。1から5は土師器である。1から3は模倣坏蓋で、天井部と口縁部の境界は明瞭で段をなしている。4は小形球形甕である。丸底で口縁部は外方に短く開いている。5は甕である。つつぬけタイプで内外面ともに粘土紐接合痕跡が明瞭である。6から8は須恵器である。6は坏蓋である。天井部と口縁部の



第3図 遺構配置図 (S=1/150)



- 1層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性高い、しまり強い、～10mm程の白色軽石多く含む。炭化物散在。
- 2層 に近い黄褐色土 (10YR4/3) 粘性、しまり強い、白色軽石含む。地山土含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性低い、しまり弱い、小さな白色軽石含む。3'層は色調がより明るい。
- 4層 に近い黄褐色土 (10YR4/3) 粘性低い、しまりあり。白色軽石多く含む。地山土含む。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性、しまりあり。白色軽石まばらに含む。
- 6層 褐色土 (10YR4/4) 粘性低い、しまり弱い。白色軽石強めに含む。炭化物散在。地山土含む。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。白色軽石、地山土多く含む。
- 8層 に近い黄褐色土 (10YR4/3) 粘性なし、しまり弱い。砂層と地山土の混在。白色軽石含む。炭化。

第4図 竪穴建物2実測図 (S=1/60)

の竪穴建物11との重複部分は、土層確認用のベルトで確認された部分などを除いて不明、あるいは復元のラインとなっている。同様に柱穴などの建物内遺構の所属に関しても、掘削時にその判別は困難であったため、竪穴建物10と竪穴建物11の掘削後、配置関係や検出レベルなどからの検討をおこなった。

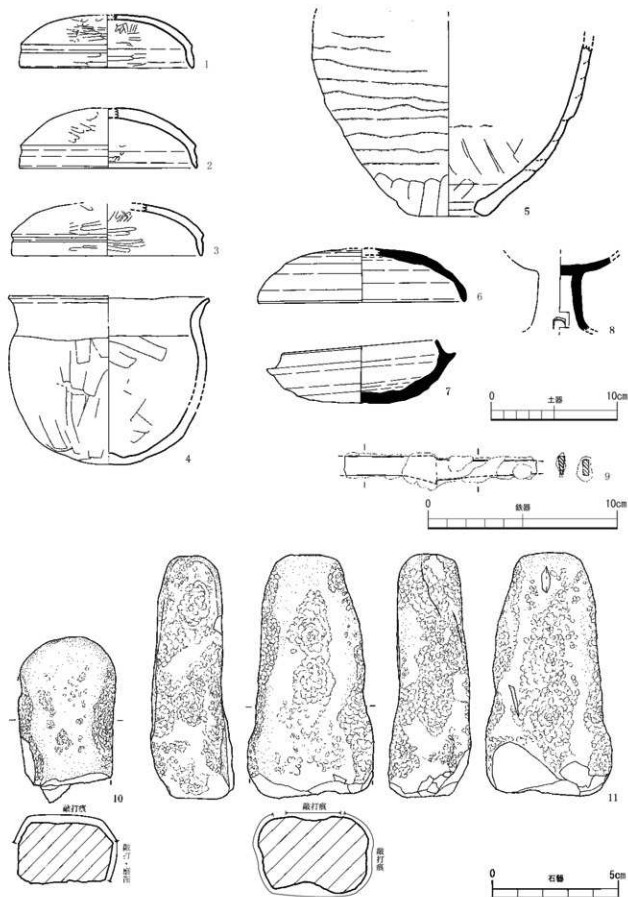
規模は長軸6.8m、短軸6.2mであり、7mには届かないものの、大型の竪穴建物といえる。上述のように、検出時には平面形の確定が困難であったことから、東西2本、南北3本のベルトを設けて、断面観察しつつ掘り下げをおこなった。検出面から0.45m程下げたところで貼床(15層)を検出した。貼床面に硬化は認められないが、建物南東側で締りのある粘性の高い黒褐～暗褐色土が床面直上3～5cm程の厚みで部分的に検出された。床の構成物の一部であった可能性もあるが、範囲も明確でない。検出面から掘方までの最大深は0.76mであった。

建物内遺構は柱穴7基(柱穴1～柱穴7)と土器埋設炉1基を検出した。柱穴は、柱穴5と柱穴7、柱穴3以外は掘方面で検出した。柱穴3からは高環と環が意図的に配置された状態で出土した。そ

境界は不明瞭で、回転ヘラケズリは天井部の中ほどまで施されている。7は坏身である。口縁部立ち上がりは短く内傾している。回転ヘラケズリは底部周辺にのみ認められる。8は高環である。短い脚部に方形の透孔がある。9は刀子である。刃部から茎部の破片で、関は両関とみられる。10、11は敲石である。特に11は敲打痕が顕著で全面に認められる。

本遺構出土遺物は、古墳時代後期後半、6世紀後半(MT85からTK43型式期、今堀屋編年6から7期)に位置付けられ、本遺構の帰属時期も同様に考えられる。

竪穴建物(SA)10(第6～10図、第12図、第14図)調査区中央東側に位置する。竪穴建物11と重なるように検出された、方形の竪穴建物である。竪穴建物11、溝状遺構21を切っており、溝状遺構5、溝状遺構8、掘立柱建物4に切られていた。竪穴建物11とは埋土が非常に似通っており、両者の境界を平面で確認することは困難であった。そのため、本建物の上端ライン



第5図 竪穴建物2出土遺物実測図

の出土状況は、破砕した高杯（15）が底面から0.11m程浮いた位置で折り重ねられ、その上に完形の杯（12）が口縁部を上にして置かれたような状態であった。断面観察で柱痕が確認されていないことから、高杯と杯は柱抜き取り後に配置された可能性が高い。また、図化していないが、これら遺物下部の底面付近では拳大程の軽石が出土した。上述した遺物とは出土レベルが異なるため、土器と共に埋納されたものではなく、柱の根石などとして用いられていた可能性がある。火処は、土器埋設炉1基を検出した。建物中央のやや南側、b-b'間のベルト内に位置していたため、周囲を掘方面まで掘削した後に検出できた。炉体土器には甕が据え付けられていたが、胴部より上が破損し、その一部が北東側に流れている状態であった。掘方は周囲を先に掘削していた関係上、東側の形状が不明瞭となっているが、最大長0.75m、深さ0.29m程の掘り込みが確認できた。なお、この土器埋設炉は、北西側にある最大長0.43m、深さ0.17mの同規模の土坑を壊して構築されていた。このことから、土器埋設炉のつくり替えがおこなわれていた可能性を考えたが、土坑の検出面が掘方面であり、貼床面で検出できなかったことを考慮すると、後述する堅穴建物11の建物内遺構であった可能性もあるため断定はできない。なお、炉体土器は、取り上げ後の破損が著しく図化していない。

遺物は基本的に埋土中から破片で出土したが、脚部が打ち欠かれた須恵器高杯（17）のみ、天地を逆にして建物北東隅部に立て掛けられるように出土した。この高杯は、脚部の意図的な打ち欠き、建物隅の床面直上という出土状況から、意図的に置かれた可能性が高く、本建物を廃絶する際に置かれたものと考えられるだろう。その他の遺物は、先述したように埋土からの出土であるが、堅穴建物11と同時掘削した関係上、出土位置を記録していない遺物（14、19、20）の帰属は確定的ではないことを述べておく。

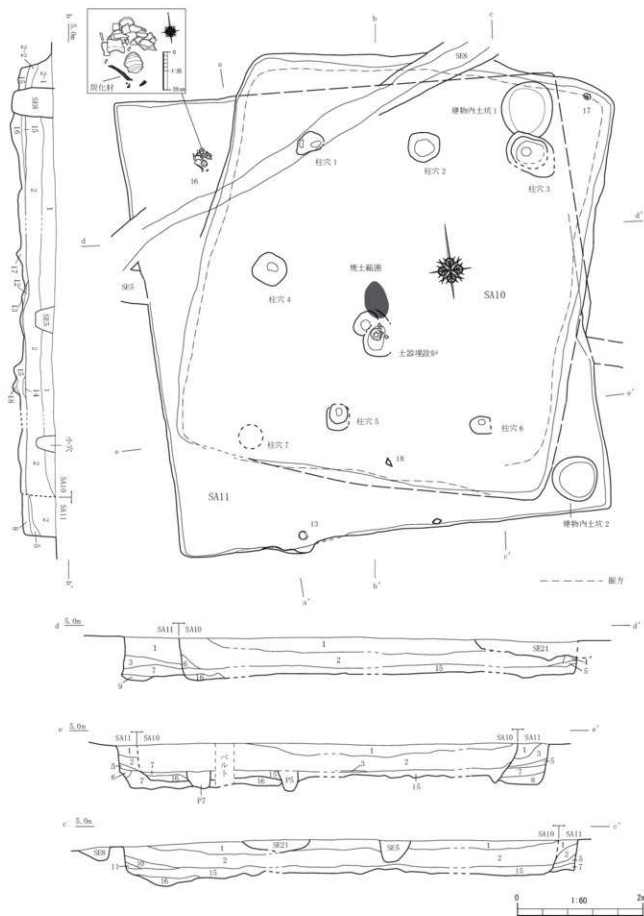
2、14から16は土師器である。12は坏で内外面ともにミガキが施される。14は模倣坏身である。坏部立ち上がりは僅かに内傾する。15は高坏である。坏状の坏部を持ち、脚部はスカート状に開いている。17、18は須恵器である。18は器台である。脚部片で、脚端部は丸く仕上げられており、外面には櫛描波状文が認められる。19、20は敷石である。20は外面に被熱による赤化が認められることから金属加工具の可能性が考慮される。

本遺構から出土した遺物は、古墳時代後期末、6世紀末（TK43型式期、今堀屋編年7期）に位置付けられる。本遺構の帰属時期も同様に考えられる。

堅穴建物（SA）11（第6～7図、第11～14図） 調査区中央東側に位置する。堅穴建物10と重なるように検出された。端正な方形の堅穴建物である。堅穴建物10、溝状遺構5、溝状遺構8、掘立柱建物4に切られている。大部分を堅穴建物10に切られているが、四隅のコーナー部は全て残存していた。先述したように、堅穴建物10と同時掘削後に建物内遺構の検討をおこなった。

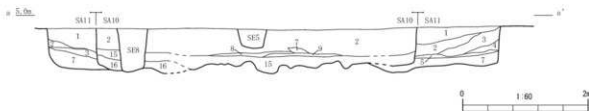
規模は、東西最大幅7.0m、南北最大幅7.3mであり一辺が7mを超える大型堅穴建物である。主軸は、ほぼ真北を向いている。堅穴建物10の項で述べたように、東西2本、南北3本のベルトを設けて、断面観察しつつ掘り下げをおこなった。検出面から0.41m程下げた部分で貼床（8層）を検出した。貼床面の硬化等は認められなかった。検出面から掘方までの最大深は0.74mであった。

建物内遺構は土坑2基を検出した。柱穴は認められなかった。建物内土坑1は建物北東隅に配置され、長さ1.36m、幅1.21m、深さ0.57mの楕円形である。建物内土坑2は、建物南東隅に配置され、長さ1.06m、幅1.05m、深さ0.44mの円形である。土坑1、2ともに遺物は出土していない。この2基の土坑は、形態、規模、建物隅への配置という点が共通している。貯蔵穴としての用途を推定し



第 6 図 竪穴建物 10、11 実測図①(S=1/60)

第3節 堅穴建物



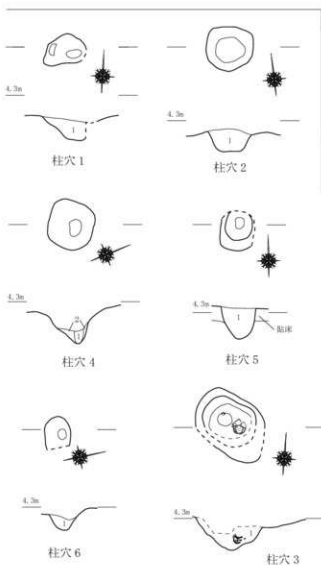
SA11

- 1層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。地山土ブロック多く含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。1層とほぼ同質だが、地山土ブロック多く含む。
- 4層 3層とほぼ同質土。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性、しまりあり。黒味のある粘質土。地山土ブロック多く含む。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性低い、しまり弱い。2層と似るが、炭化物等はほとんど含まない。
- 7層 灰黄褐色土 (10YR4/3) 粘性、しまりなし。暗褐色土と地山土が混じる。地山土ブロック多く混じる。
- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/3) 粘性、しまりなし。砂質土。青砂に暗褐色土が混じる。
- 9層 灰黄褐色土 (10YR4/3) 粘性、しまりなし。砂質土主体に暗褐色土混じる。

SA10

- 1層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。土器粒、炭化物粒、軽石粒を含む。最下層に褐色土が薄く層状に堆積する箇所あり。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。土器粒、炭化物、～2cm程度の軽石多く含む。地山土含む。
- 2層 2層と同質だが、地山土ブロック多い。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性高い、しまりあり。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり、しまりあり。2層とほぼ同質だが、色調やや暗い。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性高い、しまりあり。地山土ブロックが多く混じる。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/3) 粘性、しまりあり。2層とほぼ同質だが、色調やや暗い。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性、しまりあり。炭化物、土器粒を含む。
- 8層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。7層と似るが、色調暗い。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。8層と似るが、粘性が高い。
- 10層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。2層と似る。地山土ブロックを多量に含む。
- 11層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。2層とほぼ同質。炭化物、軽石等ほとんど含まない。
- 12層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性低い、しまりなし。焼土含む。
- 13層 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性高い、しまりあり。粘質土。
- 14層 暗褐色土 (10YR4/3) 粘性低い、しまりあり。暗褐色土と地山土が少量混じる。
- 15層 灰黄褐色土 (10YR4/3) 粘性、しまりあり。地山土と暗褐色土を半々混じり合う。
- 16層 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性なし、しまり弱い。地山土を主体とし、暗褐色土が少量混じる。砂分含む。
- 17層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性、しまりあり。地山土ブロックを多く含む。
- 18層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりなし。砂質土に暗褐色土混じる。

第7図 堅穴建物10、11実測図②(S=1/60)



- 柱穴1 1層 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性あり、しまり強い。明黄褐色土ブロック含む。
- 柱穴2 1層 灰黄褐色土 (7.5YR5/6) 粘性あり、しまり強い。地山土含む。
- 柱穴3 1層 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性あり、しまり強い。1cm大の小石を含む。
- 柱穴4 1層 褐色土 (10YR4/4) 粘性あり、しまり強い。
- 2層 褐色土 (10YR4/3) 粘性あり、しまり強い。地山土含む。
- 柱穴5 1層 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性あり、しまり強い。粘質土ブロック多く含む。
- 柱穴6 1層 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性あり、しまり強い。明黄褐色土ブロック含む。

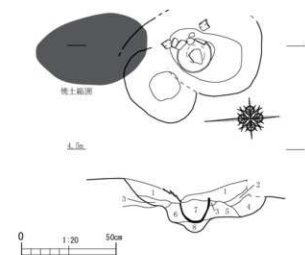


第8図 堅穴建物10、11柱穴実測図

(S=1/40)

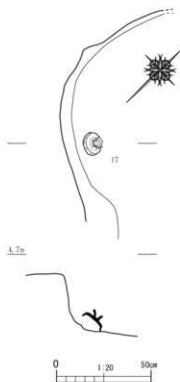


第9図 柱穴3遺物出土詳細図 (S=1/10)



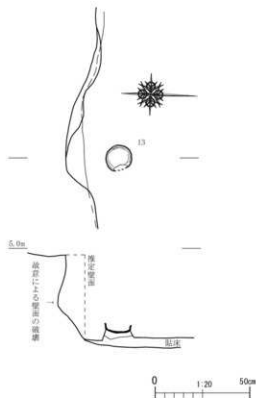
- 1層 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり。しまり弱い。土器粒、炭化物、白色粒子含む。桃土多く含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性、しまりあり。白色粒子、炭化物粒含む。
- 3層 褐色土 (10YR5/4) 粘性あり。しまり弱い。炭化物粒、地山土含む。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性。しまりあり。白色粒子を少量含む。
- 5層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり。しまり弱い。地山土ブロック、黒褐色土粒を含む。暗褐色土と地山砂の混土层。
- 6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 5層とほぼ同質土だが、地山砂の混じりが少ない。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性あり。しまりなし。間、桃土を主体とし、暗褐色土が混じる。土器粒僅かに含む。本層中にもがけ体土器片とみられる土器片含む。
- 8層 褐色土 (10YR4/4) 粘性。しまりあり。炭化物粒、白色粒子を含む。

第10図 竪穴建物10土器埋設炉実測図 (S=1/20)



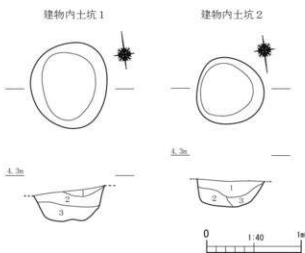
第12図 竪穴建物11北壁遺物出土状況図

(S=1/20)



第11図 竪穴建物11南壁遺物出土状況図

(S=1/20)



建物内土坑1

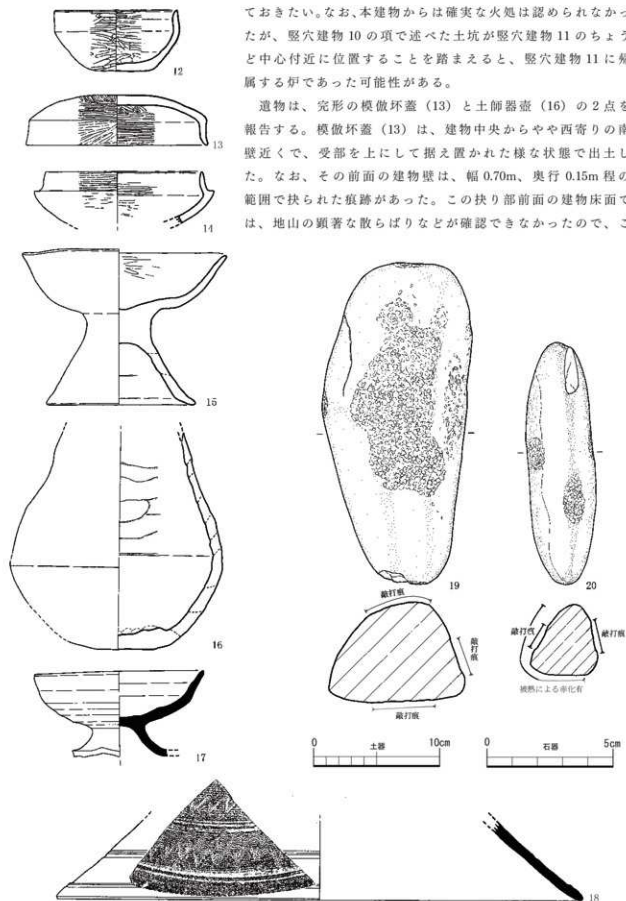
- 1層 褐色土 (10YR4/4) 粘性低い。しまり強い。地山土ブロック少量含む。
- 2層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり弱い。地山土ブロック多く含む。
- 3層 オリーブ褐色土 (2.5Y4/6) しまり弱い。地山土ブロックを微量含む。

建物内土坑2

- 1層 にぶい褐色土 (10YR4/3) 粘性低い。しまり強い。地山土ブロック多く含む。
- 2層 にぶい褐色土 (10YR5/3) 粘性低い。しまり弱い。砂質土。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性低い。しまり弱い。地山土ブロックを微量含む。

第13図 竪穴建物11建物内土坑実測図

(S=1/40)



第14図 竪穴建物 10、11 出土遺物実測図

ておきたい。なお、本建物からは確実な火処は認められなかったが、竪穴建物 10 の項で述べた土坑が竪穴建物 11 のちょうど中心付近に位置することを踏まえると、竪穴建物 11 に帰属する炉であった可能性がある。

遺物は、完形の模倣坏蓋 (13) と土師器壺 (16) の 2 点を報告する。模倣坏蓋 (13) は、建物中央からやや西寄りの南壁近くで、受部を上にして据え置かれた様な状態で出土した。なお、その前面の建物壁は、幅 0.70m、奥行き 0.15m 程の範囲で扶られた痕跡があった。この扶り部前面の建物床面では、地山の顕著な散らばりなどが確認できなかったので、こ

の痕跡がどの段階で形成されたかは定かではないが、据え置かれた模倣灰蓋との有機的な関係も想定される。竪穴建物 10 の項で述べた帰属が明確でない遺物（14、19、20）が本遺構に帰属する可能性があるが明確でない。

13 は、天井部と口縁部の境界は明瞭で、口縁部はやや外側に開いている。16 は、建物北西部の床面から 5 ～ 10cm 程浮いた位置で、口縁部が欠損するものの、一個体分が炭化材と一緒に出土した。土師器壺（16）は、胴下部に最大径があり、口縁に向かってすばまった形態である。内面の粘土紐接合痕跡が明瞭である。模倣灰蓋と土師器壺の両者とも、竪穴建物 11 廃絶のタイミングで設置あるいは廃棄された可能性が高い。

本遺構から出土した遺物は、古墳時代後期後半、6 世紀中頃（MT85 型式期、今塩屋編年 6 期）に位置付けられる。本遺構の帰属時期も同様に考えられる。

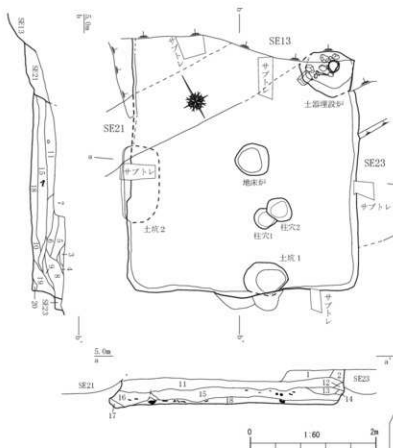
竪穴建物 22（SA）（第 15 ～ 24 図） 調査区北東部に位置する。方形の竪穴建物である。溝状遺構 23 を切り、溝状遺構 13、溝状遺構 21 に切られている。溝状遺構 13 に北側を削平されているため南北の正確な長さは不明であるが、残存長で南北 4.1m、東西 3.7m である。ただし、南北の長さは後述する地床炉が建物中央付近にあったと仮定すると、4.2m 前後と推定されるので、あまり大きな削平は受けていない可能性が高い。検出面から 0.55m 程掘り下げた部分で床面が確認できたが、明瞭な貼床は認められず、床面の硬化も認められなかった。検出面から掘方までの最大深は 0.57m であった。

建物内遺構は、地床炉 1 基、柱穴 2 基、土坑 1 基（建物内土坑 1）を検出した。主柱穴は認められない。地床炉は建物中央部で検出された。規模は、最大径 0.54m 程の不整形円で、床面からの深さ 0.08m である。最下層には焼土がみられ、底面は被熱していた。建物内土坑 1 は中央南壁際に位置する。規模は、長軸 0.7m、短軸 0.5m 程の不整形円で、床面からの深さは 0.3m である。

その他、建物内で検出されたが竪穴建物 22 への帰属が不明瞭な遺構として、土坑 1 基（建物内土坑 2）、土器埋設炉 1 基がある。建物内土坑 2 は建物中央西壁において検出され、建物壁面に沿うようにオーバーハングした掘り込みが幅 1.2m、奥行き最大 0.2m 程の範囲で確認された。遺物は出土していない。掘り込み部は東西ベルト上に位置していたため土層断面の検討をしたが、竪穴建物 22 埋土との明瞭な土層の差異がなかったため、調査時には屋内施設あるいは竪穴建物 11 のような壁面を扶ったものとして捉えていた。しかし、建物内土坑 2 周辺には遺物が分布しないこと、土坑埋土とみられる 16 層が建物埋土の 18 層を切って掘り込まれているように見えることから、本土坑は 15 層堆積後、あまり時間を空けずに掘り込まれた別遺構の可能性がある。竪穴建物壁面に何らかの掘り込みをもつ事例には、北中遺跡 2 次調査で確認された、建物壁面を利用した地下式横穴墓や部城市大窪第 1 遺跡 SA2 で確認された横穴状遺構などがある。本遺構で確認された土坑がどういった性格をもつのかについては、現状で不明な点が多いが、建物廃絶後にその壁面を利用して構築された何らかの施設であることは間違いないだろう。

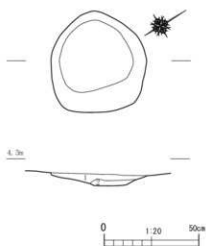
土器埋設炉は、建物北東部で検出された。竪穴建物 22 内において検出されたため、本遺構にもなう土器埋設炉であるとの認識で、建物とともに調査をおこなった。

炉体土器は、口縁部の欠けた甕が用いられており、胴部より上の東側部分が内側に傾いている以外は良好な遺存状態であった。炉体土器西側の底部から胴部にかけては拳大ほどの軽石で固定されていた。掘方は北側を溝状遺構 13 によって削平されているため南北長の詳細が不明であるが、南北 0.73m 以上、東西 0.85m、深さ 0.26m 程の不整形円形となる。この掘り込みの東側辺は、やや開



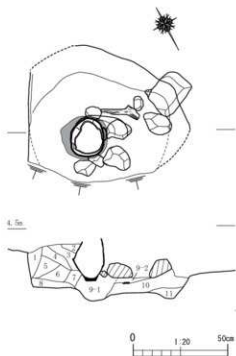
- 1層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。白色粒子、炭化物粒、土器片含む。地山土含む。
- 2層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。1層とほぼ同質だが、色調がやや暗い。
- 3層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。白色粒子、土器片多く含む。
- 4層 増褐色土 (10YR3/4) 3層とほぼ同質だが、地山土を含む。
- 5層 増褐色土 (10YR3/4) 3層とほぼ同質。
- 6層 増褐色土 (10YR3/4) 5層と似るが、やや明るい。土器片多く、炭化物、軽石粒、白色粒子含む。
- 7層 増褐色土 (10YR3/4) 6層とほぼ同じだが、白色粒の含有が多く、土器片少なく小粒。
- 8層 増褐色土 (10YR3/4) 5層とほぼ同質だが、地山土の含有量多い。
- 9層 増褐色土 (10YR3/4) 8層とほぼ同質だが、土器片、土器粒を含まない。
- 10層 増褐色土 (10YR3/3) 15層とほぼ同質だが、土器片、炭化物を含まない。
- 11層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。白色粒子、土器片多く含む。
- 12層 増褐色土 (10YR3/4) 11層とほぼ同質だが、地山土、地山粘土をブロックで含む。
- 13層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。白色粒子、炭化物粒、地山土、地山粘土ブロック含む。
- 14層 増褐色土 (10YR4/4) 増褐色土と地山砂混じりの土層。原褐色土ブロックを含む。
- 15層 増褐色土 (10YR3/3) 粘性、しまりあり。白色粒子、炭化物、地山粒を含む。ブロック状炭化物含む。
- 16層 増褐色土 (10YR3/2) 粘性、しまりあり。土器片、軽石粒含む。大きな地山ブロックを多く含む。
- 17層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性低い、しまり弱い。地山砂と16層が混じった土層。軽石粒含む。
- 18層 増褐色土 (10YR3/3) 15層とほぼ同質だが、地山砂や炭床が混じり、やや明るい。土器多量に含む。
- 19層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性、しまりあり。土器片含む。地山土ブロックを多量に含む。
- 20層 増褐色土 (10YR3/3) 粘性高い、しまりあり。地山土含む。

第15図 竪穴建物22実測図 (S=1/60)



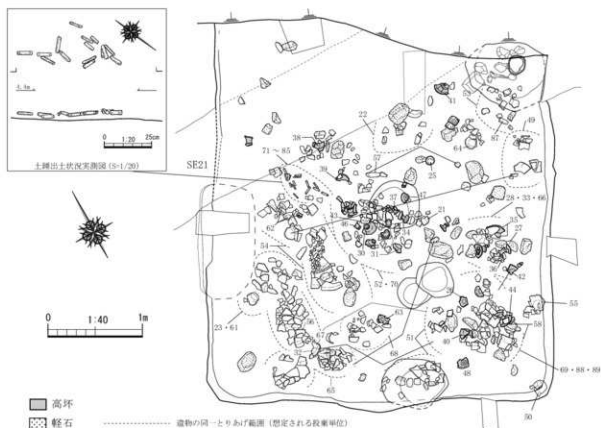
- 1層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性弱い、しまりなし。褐色ブロック状に混じる。
- 2層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性弱い、しまりあり。焼土混じり。

第16図 竪穴建物22地床炉実測図 (S=1/20)



- 1層 褐色土 (10YR4/4) 粘性低い、しまりなし。砂質土。
- 2層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性高い、しまり強い。焼土を多く含む。
- 3層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性高い、しまり強い。焼土、褐色土を混かに含む。
- 4層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性高い、しまり非常に強い。
- 5層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性高い、しまり非常に強い。褐色土を含む。
- 6層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性高い、しまり非常に強い。褐色土をブロックで含む。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性低い、しまり弱い。褐色土および砂質土を含む。
- 8層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性あり、しまり弱い。褐色土、砂質土を含むが、7層より割合は少ない。
- 9-1層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性あり、しまり弱い。褐色土をまばらに含む。土器片を多く含む。
- 9-2層 増褐色土 (10YR3/4) 9層とほぼ同質だが、より明るい。
- 10層 増褐色土 (10YR4/3) 粘性低い、しまり弱い。砂質土。
- 11層 増褐色土 (10YR3/4) 粘性低い、しまり弱い。砂質土。

第17図 土器埋設炉実測図 (S=1/20)

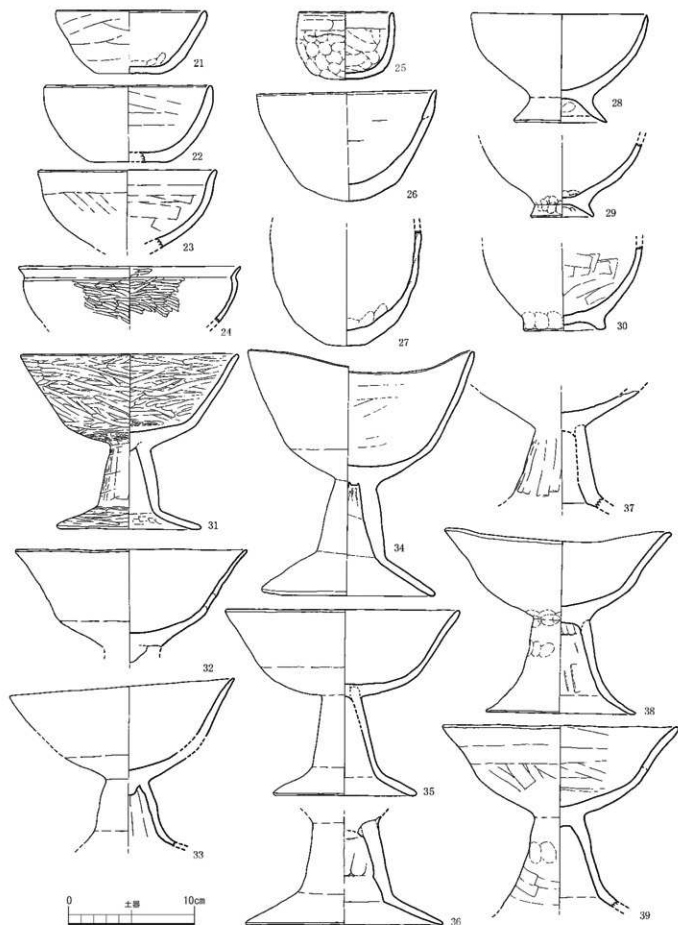


第18図 堅穴建物22 遺物出土状況図 (S=1/40)

くもの堅穴建物22 壁面とほぼ平行している。掘方西辺沿いには軽石が設置されていた。軽石は炉体土器の固定の他、区画としても用いられていた可能性がある。軽石に顕著な被熱はなかった。なお、固定用の軽石の下や9層からは炭化材や土器片が多く出土したため、炉のつくり替えがあった可能性があるが、先行する掘り込みなどは確認できなかった。

本土器埋設炉は堅穴建物22 にともなうとすると、炉体土器の受け口が床面から15cm以上も浮くこと、堅穴建物22 の壁面が土器埋設炉の部分でやや外側に開くことにやや違和感があり、加えて整理作業の結果、炉体土器(59、60)に用いられていた甕の年代観が堅穴建物22 出土の遺物より1世紀程新しいことが判明したので、堅穴建物22 との直接的な関係性は薄いことがわかった。その場合、周辺に該当期の遺構がないことから、単独の屋外炉であったと考えるのが妥当であろう。以上のことから、本来は堅穴建物22 とは別項を立てるべき遺構であるが、建物内土坑2と同様、堅穴建物22 との関係性に検討の余地を残すため、本項での報告とした。

遺物は、床面直上から15層と18層にかけて、土師器(甕、壺、高坏、台付鉢、鉢)、須恵器(甕片、把手付鉢、壺、坏)、石器(軽石、敲石、器種不明等)、土鍾等が大量に出土した。器種では特に高坏が多く、口縁部を意図的に打ち欠いたものもみられた。土鍾は15点がまとまって出土しており、廃棄時には網に装着された状態であった可能性がある。遺物の分布から幾つかの投棄単位が確認できたが、やや離れた場所同士での接合関係も数点ある。完全な形になる土器はほとんどないことを考慮すると、単位毎に違う場所で土器を破砕後、建物内に投棄した可能性も考えられる。これらの遺物は、建物内遺構と重なる部分でも床面と同一レベルで出土しており、建物内遺構を埋めた後に廃棄をおこなったようである。また、これらの遺物は、地山土および炭化物を含んでいる土(15層、18層)で覆われており、遺物廃棄後に間を置かず一気に埋められたことが想定される。な



第19図 竪穴建物22出土遺物実測図①